

歌壇 俳壇



＜日曜日のブローチ 37＞ junaida

高山れおな選

土偶にも木偶にもなれず日向ぼて
（いわき市）馬目 空
レノン忌や銃のかたちの検温器
（宝塚市）大曲富士夫
一陣の風綿虫を一掃す
（玉野市）勝村 博
沖をゆくタンカー見ゆる葉喰
（尾張旭市）古賀勇理央
秋邸の句碑より先は眠る山
（新庄市）三浦 大三
ごっそりとアワダチソウの冬野かな
（東京都新宿区）各務 雅憲
白息の連なり行けり通勤路
（伊丹市）保理江順子
冬晴やノート持つ子ら福宜囀む
（名古屋市中区）壁谷てる子
木管の響き柔らかな年惜しむ
（習志野市）加藤 真理
躁もをり鬱もをりけり年忘れ
（栃木県壬生町）あらゐひとし

【評】ミンナニデクノポートヨバレ云々は宮沢賢治。馬目さんの句の心は、ともあれ自分が自分である事の不思議。大曲さん。先日、病院でこのタイプの計器を額に当てられた。インフルでした。勝村さん。「一掃す」という言葉の発見が手柄。

小林 貴子 選

おでん酒万太郎の句好き同士
（川越市）渡邊 隆
原因に手当てせぬまま隙間風
（筑紫野市）二宮 正博
母の忌や冬の湖底にあるやうな
（高松市）島田 章平
とこしえの時のみずうみオリオン座
（福井市）佐々木祐香子
ずりずりと大きな落葉の進むなり
（藤岡市）飯塚 柚花
大鷲や黄爪開きて急降下
（尾崎市）浮田 正代
南無昭和百年十二月八日
（芦屋市）正井 健一
鯛焼の焼き上がり待つ子の背伸び
（日光市）土屋 恵子
指揮台をぐるりとボインセチアかな
（高松市）葛原 由起
ガンダーラまで行きたくて日向ぼて
（秩父市）浅賀信太郎

【評】一句目、久保田万太郎の俳句が好きな句友同士とは羨ましい。私も混ざりたい。二句目、冬の季語「隙間風」を楽しむとは言わずとも、現状のままで。三句目、なんと静かな心象風景か。四句目、これも静かで、純粋な詩情を感じる。

長谷川 權選

山科の雪がひとひら舞台より
（名古屋市中区）池内 真澄
打ちのめす雪の白さでありにけり
（長野市）縣 展子
耐へがたきことを招きぬ開戦日
（東京都世田谷区）野上 卓
冬晴れや折々響く山のこゑ
（長崎市）下道 信雄
清らかな師走満月自然神
（新宮市）中西 洋
蛇行また蛇行重ねて川は濁る
（玉野市）勝村 博
顎あげて顔認証や開戦日
（袋井市）勝田 敏勝
笛鳴や木々の中なる大手門
（朝倉市）深町 明
山深く熊を眠らせ山眠れ
（藤沢市）朝広三猶子
四選者対峙す熊の一万句
（八王子市）額田 浩文

【評】一席。「仮名手本忠臣蔵」山科閑居の段。舞台と客席、物語と現実をつなぐ一片の雪。二席。美しさと苦しみと。それが「打ちのめす」。三席。玉音放送の四年前、その発端。十句目。「物騒なまま年越さんとす」。額田さんへの付け句。

大串 章選

羽子板の似顔絵にみる世相かな
（玉野市）加門 美昭
近きし子の母校の落葉踏みにけり
（東京都江東区）小出 功
冬木立生き生き力溜めてをり
（長野市）縣 展子
気がつけば老老介護年流る
（小平市）野口 佐穂
縁側にいのちを洗ふ日向ぼて
（寝屋川市）今西 富華
残されて書きつづけた日記果つ
（合志市）坂田美代子
丁寧に生きたき余生日記買ふ
（伊丹市）保理江順子
窓を拭くだけの男や年用意
（柏市）藤嶋 務
老いてなほ強気の十年日記買ふ
（前橋市）荻原 葉月
渾身の投句二百や年暮るる
（広島市）谷脇 篤

【評】第1句。令和7年話題の人というと、高市早苗首相や大谷翔平選手などが目に浮かぶ。第2句。校庭の落葉を踏みながら、元気に通学していた亡き子を偲ぶ。第3句。冬木立が溜めた力は、春になるとと芽を吹き、夏になるとと若葉として耀く。

俳句時評 二つの六林男論

岸本 尚毅

「ねて見るは逃亡ありし天の川」は逃亡兵が出たことを知りながら、前線に留まっていた兵の思い。《射たれたりおれに見られておれの骨》は戦場の瞬間。いづれも鈴木六林男の作。これらを、川名大は「前線俳句の精華」「生と死にかかわる軌跡」「強烈な自意識を支えたリアリズム」と評した（近刊の『昭和俳句史』（角川書店））。

「暗闇の眼玉濡さず泳ぐなり」は六林男の戦後の作。これを川名は「混沌の世に眼を曇らせず、意志的に生きようとする」生き方の現れと捉える。川名の俳句史は、表現史と俳壇史を包摂したところに妙味がある。六林男の句を戦中戦後のリァリティーを体現した作と位置づけたのも、ごく自然な見方と思われる。

高橋はまた「おれの骨」の句は「『おれ』が、『見る』ものと『見られる』ものに解離している」といい、「暗闇の」の句は「（眼玉）という原初的と言ってよい生々しい身体性のクロースアップ」だという。高橋の六林男論は、時代的背景も踏まえつつ、六林男という俳人をも「個」として深く掘り下げた。川名の俳句史と高橋の作家論、これらを併せ読むとき、六林男自身が、自らの句が時代の産物であることを自覚し、そのうえで詩としての普遍性を求めて言葉と格闘していたであろうことが想像されるのである。（俳人）

◆1月4日付の朝日歌壇俳壇面は休載します。

風信

小島なお歌集「窮降る」 2021年から25年までの作品を収めた第4歌集。「いいもい、いなくともいい 選ばれし花びら散ってきみにいてほしい」（左右社・2200円）第6回BR賞 該当者なし。歌集・歌書の書評を対象に現代短歌社が主催する賞。第13回現代短歌社賞 該当者なし。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。QRコードから。